

東日本大震災きょう5年 明日へ歩む あの日胸に

死者 15,894人 行方不明者 2,561人 震災関連死 3,407人、原発関連死 1,232人
現在の避難者数 約 174,000人 プレハブ仮設住宅入居者数 57,677人

今年も3月11日がやって来ました。5年前のあの日も同じく金曜日でした。

「あの日のことを思い出すので、3月11日は来ないでもらいたい」「早く亡くなった家族の傍へ行きたい」と思っている被災者もいます。また、「自分は家族を亡くして、家も流されたが、全国の人達の支援のお陰で、生きる希望が湧いた」「海は自分の周りの多くの人の命を奪った。それでも私は海が好き」と言う被災者も多いです。

3月11日には、福島県の多くの中学校で、卒業式が行われました。原発事故で避難している仮設校舎での卒業式。被災者にとって、この5年間に長かったのか、短かったのか、私には良くわかりませんが。福島県では、帰還困難区域を解除して、家へ帰れるようになるのが復興（政府と東京電力）と、古里が、事故前の活気とコミュニティのある街になるのが復興（被災者）と、復興についての思いに、大きな違いがあります。

この日、気仙沼市でも、午後2時46分、防災無線でサイレンが鳴り、多くの市民が、1分間黙とうしました。工事現場では、作業員の人達が、黙とうをして、復興への決意を新たにしました。総合体育館で行われた、東日本大震災追悼式では、スマトラ沖大地震インド洋大津波で壊滅的な打撃を受けた、インドネシア・アチェ州のザイニ・アブドゥラ知事が、来賓挨拶をしました。（私は、インドネシアへ行かなければと、一人思いました。）

3月11日にだけ振り返るのではなく、毎日ちょっとだけでも 想ってほしい

「東日本大震災の発生から11日午後2時46分で5年がたつ。未曾有の大災害がつきつけた困難と向き合い、積み重ねてきた災後の日々。再生への道は長く、まだまだ半ばだ。少しずつ開く復興の扉。差し込む道を照らしているだろうか。

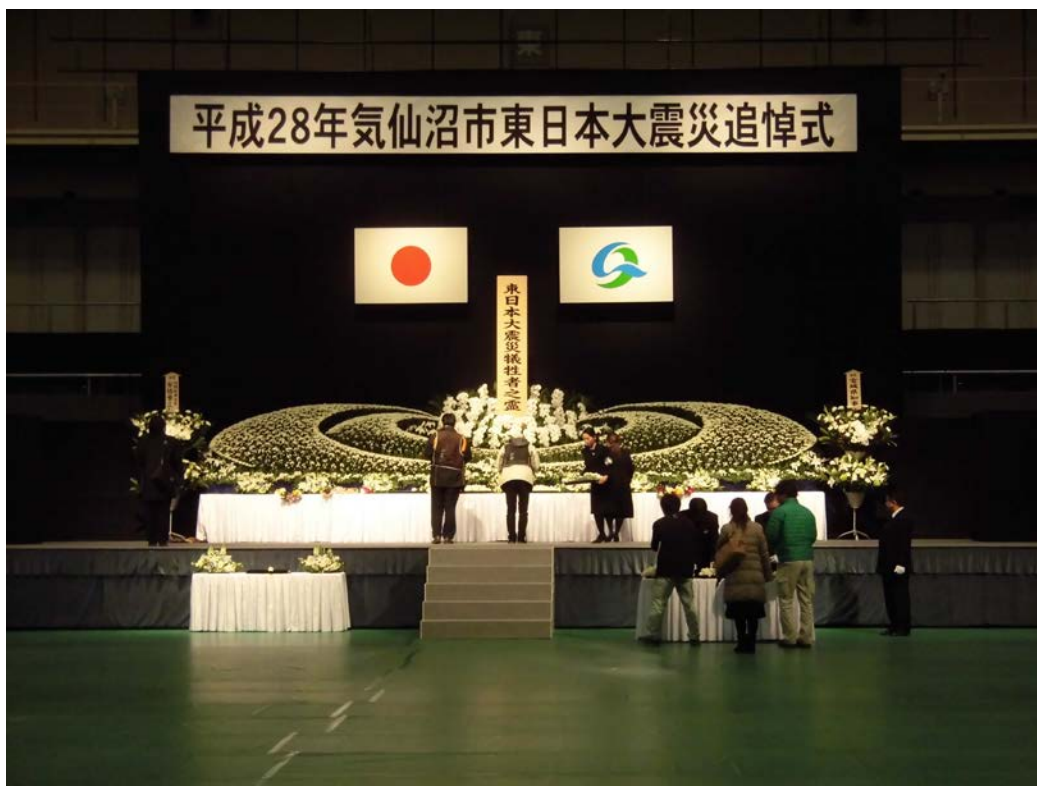
津波で壊滅的な被害を受けた街や集落では、新たなまちづくりが進む。かさ上げで大量の土を盛った被災地はまるで異空間だ。5年がたった復興途上の景観が問いかけるものを思う。

震災と東京電力福島第1原発事故は、長い仮住まいを強いた。なお17万4,000人が避難生活を送る。コミュニティーは揺らぎ、家族の分断も招いた。特に福島では、古里に戻るか否か、戻れるのかどうか、少なからぬ人が答えを出せずにいる。」

震災から5年。3月11日に、私が思うこと。

「屋上で見た、町の風景。あの夜の星空の美しさ。あの日のことは生涯忘れないだろう。あの日、生きたかった命を私は忘れない。暗く寒かった避難所のこと、飲みかけの水をくれた友人、たった一つのおむすびの味、あの日から5年、スイッチ一つで電気がつき、並ばなくても買えるスーパー。トイレの水を気にしない生活。せめて3月11日、年に1回はあの日のことを忘れないために、生活を見直す1日でありたいと思う。」◎仙台

市泉区（震災時は南三陸町）・女性 60 歳（「河北新報」16 年 3 月 11 日付け）
【平成 28 年東日本大震災追悼式（気仙沼市）】



【93 人が津波で犠牲になった 杉ノ下地区の慰霊碑（気仙沼市）】

